〈授業レポート〉

日本史教育における校外学習の役割

加　藤　　将*

はじめに

私は昨年度，筑波大学附属高等学校で日本史Aを担当する機会を得た。附属高校は，江戸時代以来の日本の政治や経済の中心地である東京都千代田区周辺にも近い，東京都文京区大塚に位置する。そのため，日本史に関係がある場所や建物が生徒の通学路上に多数存在する。しかし，学校周辺や通学路上で発生した出来事を授業で講義し分かったことは，生徒がそれらの場所を歴史的な場所と意識していないということであった。この地域の特性を活かした授業を展開するため，私は学校周辺や通学路上で発生した出来事を授業で取り上げることとした。なぜならば歴史が過去と断絶していなく，脈々と続いていることを生徒に感じて欲しかったからだ。脈々と続いていることを感じることによって，生徒自身が歴史を自らの社会生活に関連し現代社会の課題を意識するようになることをめざした。

学習指導要領における日本史A・Bでは，「歴史的思考力を培い，国民としての自覚と国際社会に主体的に生きる日本人としての資質を養う。」ことが目指されている。つまり，歴史を通して考える力を身に付け，現代社会が抱える諸問題に歴史の視点から関わることを目的にしている。また歴史的思考力を培うには，知識のみからは育むことはできない。だからこそ，実感を伴うために体験的な活動が必要と考える。生徒は，歴史が継続し現代社会が成立していることや過去からの課題が今なお存在することに，知識として理解していながら実感として捉えられていない面がある。

以上のような現実から私は，日本史を現代社会との関わりの中で考えさせ，過去の出来事が現在と関係があること，社会事象も含んでいることを理解させるため，机上学習と関連させた校外学習を展開する必要を感じた。

校外学習の事前準備

校外学習を実施するにあたり，幾度かの下見，見学場所の選定，時間配分，説明箇所の調査などを行った。下見を兼ねた事前の見学では，地理及び歴史を専門とする教員から説明内容の吟味，安全面を配慮した見学コース・見学場所の選定などの面で助言をもらった。

校外学習での見学場所は，①筑波大学附属高等学校（江戸期：陸奥磐城平藩安藤家の屋敷跡・明治期：陸軍弾薬倉庫跡）②拓殖大学国際教育会館（昭和期：外務省茗荷谷研修所）③拓殖大学（明治期：台湾協会学校，桂太郎銅像）④三井住友銀行研修所（石碑「大塚」地名の由来）⑤茗荷谷駅前（大正期：大塚同潤会アパート）⑥筑波大学学校教育局・占春園（江戸期：陸奥守山藩松平家屋敷・明治期：東京府師範学校後，東京高等師範学校，嘉納治五郎銅像，明治天皇行幸乃碑）⑦筑波大学附属小学校周辺の印刷所地帯（大正期：共同印刷の争議，労働運動）⑧お茶の水女子大学（戦前：東京女子師範学校）の計８箇所である。下見を行う中で生徒の通学路からは外れるが附属高校からの徒歩圏内には，山県有朋の椿山荘や大隈重信・三条実美・山県有朋など明治期の政界人の墓地を擁する護国寺もあることが分かったので，見学対象として検討したが見学を見送った。限られた時間内で，歴史を意識させるには，生徒の通学路が，歴史が現代に生きていることを実感できる

＊船橋市立八木が谷北小学校

場所だと考えたからだ。そして，校外学習の結果，生徒が居住地などで歴史を発見し，現代社会と歴史のつながりを考えるのにも応用できると考えた。つまり，通学路ならば，他の場所でも応用できる力を養えると考えたのだ。その結果，見学場所に決定したのが上記の8箇所である。

見学場所の②，③については，拓殖大学に敷地内への見学を申し入れたが学生の登校日と重なり，構内に立ち入れず②の説明，③の桂太郎の銅像に記されている内容についての説明は，敷地外の道路で行うこととなった。見学日時を決める際には，見学場所の事情を考える必要を感じた。また，附属高校や筑波大学附属学校教育局，拓殖大学の土地の利用変化や所有者が地図では読みとれない面もあった。そのため，外務省外交史料館・文京区教育委員会・東京都立中央図書館などでの資料収集や問い合わせを行った。私のように，筑波大学附属高等学校の周辺に土地勘がない者でも，自治体史や教育委員会が発行している報告書を調べることで，校外学習や地域史学習を行う際の貴重な資料を得ることができると思う。

校外学習の展開

校外学習は，教員が歴史に関係がある場所や建物を説明する形式を採用した。生徒は，夏休みの課題で自らの足を使い自分の住んでいる地域の歴史について調べた。そこで校外学習では，教員が地域を歴史の眼で歩く際の視点を伝えると共に，夏休みの課題である自分の地域の歴史と比較して校外学習を受講させるため教員が説明する校外学習を採用した。今回の校外学習では，生徒が普段，生活している地域社会などにも歴史が息づいていることを気付かせ，歴史の見方や考え方を学ばせるため生徒には事前に見学場所を伝えなかった。これは生徒に対し，大きな発見を与えることには成功した。しかし「事前に見学場所を勉強したほうが，理解がより深まった。」などの意見もアンケートにはあった。校外学習を展開するには今後，生徒の実態などを考え改善の余地がある。

校外学習は，2年生2クラスで2月20，22日にクラス毎に時間割変更などの配慮を貰い連続2時間授業で実施した。1クラス40名で校外学習を行うには，危険を伴うことが下見などから予想できた。特に，説明箇所⑤から⑥，⑦から⑧の移動には，車の往来が激しい，国道254号線を横断する必要があった。そのため当日は，安全面などで配慮の必要から，教員や大学院生2名などに引率を依頼し，授業者1名と引率者2名の計3名で校外学習を展開した。授業は，通常授業開始時間に生徒を校庭に集合させ，出席確認し全員徒歩で校外学習に出発した[(1)]。出発前に教員が作成した資料類を配布し，終了後に感想のレポートを書かせた。

このうち①，②，③，⑤，⑦について，当日，生徒に説明した内容と生徒の感想を交えながら記していきたい。

①の附属高校の敷地やお茶の水女子大学を含めた一帯は，明治期に陸軍の弾薬庫が存在した。そのことを証明する石碑が，生徒が毎日通る正門入り口に存在した。石碑について生徒の感想にも「石碑（？）みたいなものがあったのを初めて知った。今まで注意力がなかったかがわかる。」「石碑にそのようなことが書いてあったなんてちっとも気付かず，今まで素通りしていました。」といった感想があった。ここから生徒が身近な場所にある歴史に気が付いていなかったことがよく分かる。

②には当初，義和団事変の賠償金で設立された東方文化学院東京研究所が存在し，その後，戦前には拓務省，大東亜省など日本の旧植民地に関係する官庁の機関がはいり，戦後は外務省茗荷谷研修所として利用されていた。研修所の移転に伴い現在に至った。昭和8年完成のこの建物は，当時の世相を反映して，東京国立博物館本館同様，帝冠様式の様相を持つ。生徒からは建築について「日本の文化を見直そうという動きがあった。」という当時の時代背景を読み

とった感想があった。生徒は，「帝冠様式」が流行した軍国主義に向かう昭和戦前期の時代背景を自分が今まで学んだ知識から読み解ったのだ。現在に息づく歴史を机上以外で感じられた一コマと言える。

③では，植民地となった台湾で活躍する人材を育成するため桂太郎が設立し日本の植民地拡大に伴い名称が変更されたこと，拓殖大学内の桂の銅像には，社会事業として済世会病院などを設置したことが書かれていることを説明した。また同大の経営には，日本のボーイスカウトの創始者である後藤新平や，国際連盟次長などを歴任した新渡戸稲造などが参画した[(2)]。そのきっかけとなったのは，台湾での植民地経営に桂・後藤・新渡戸の三者が携わったことが大学経営に参画するきっかけとなった。生徒の感想には，「拓殖大に留学生が多い理由がわかった。」「アジア関係の学部が多いのがわかった。」などがあった。

⑤駅前には，同潤会が最初に設立した働く独身女性のための「大塚同潤会アパート」が存在した。「何も意識もせずに見てきたものが実は戦前から歴史を持つということに驚いた。」や「何事にも必ず歴史があるのだなぁと改めて感じた。（中略）ずいぶん久しぶりに茗荷谷を歩いたが色々と変わってしまっていたのが気になった。かつての大塚女子アパートもなくなりそうで現代人は開発好きすぎるなぁと思った。」，「『ボロッちい建物』でしかなく，なくなってしまった今となって，歴史的な視点をもって眺めることができなったのがくやまれます。」と言った大塚アパートについての感想が存在した。小学校から筑波大の附属に通う生徒には，大塚同潤会アパートは，感慨深げだったようだ。また，校外学習実施時期が表参道ヒルズのオープン直後でもあったため，表参道の同潤会の建物との比較や，今現在の社会と歴史的建物を考えた感想が多数であった。

⑦については，筆者が生徒に「校外学習を通して一番，肌で感じて欲しい。」と願った場所であった。周辺には，明治期から大学などの教育機関が多数存在した関係で，印刷所など出版関係の企業が密集している。密集した印刷所では，大正期前後から現在まで，多くの印刷所で働く労働者がおり労働争議なども発生した。プロレタリア文学の一つである徳永直『太陽のない街』はまさに，この地に会社を構える共同印刷の印刷工場で起こった労働争議を労働者の視点から描いた作品なのである[(3)]。生徒は，1年時に履修した世界史の学習などを通して労働者と資本家の対立などを含めた社会状況や労働環境を学習した。そのため，この地帯の見学をした生徒からは「労働者と経営者との対立は容易に想像できる。」や「大塚周辺で印刷が盛んだったことはしらなかった。」と言った感想が出たので，筆者が意図した見学が出来たようだ。

（1999年発行　1万分の1の地形図「池袋」校外学習の見学ルートと見学箇所）

校外学習の意義と課題

今回，日本史の授業での校外学習における意義と課題を明らかにしていきたい。

まず３つの意義についてである。第一に，地理歴史科が目標とする現代的課題に関心を持つ，「国家・社会に参加しその形成に主体的にかかわる存在」の育成に寄与できたと考える。歴史的事象に関する知識・理解を深めるだけでなく，歴史を通して社会に関心を持つ生徒を育成できたと考える。それは「次世代に語り継がれていくべきものはきちんと守っていく必要がある。」や「私を含めた今の若い人たちは自分の国だけでなく，身のまわりのこともけっこうしらないので，ささいな物事にも目を向けていくのが必要」との生徒の感想からもわかる。知識・理解の必要性だけでなく，歴史を通して社会に関心を持ち，社会の形成者となりえる生徒を育成できたと考える。第二に，歴史を中心に据えた校外学習を展開することが出来た。従来，中学・高校での野外調査・観察，フィールドワークなど学校外を活用した授業は，社会科（地理歴史科）では，地理分野[(4)]として大半が実施されてきた[(5)]。しかし今回，歴史を中心に据えることで「身近な所で歴史を感じれると考えなった」と生徒が感想に書いたように，身近な所から歴史の視点を育てられたと考える。

第三に，自分や身近な社会に歴史が息づいており，歴史が断続したものでないことに気づかせることが出来たと考える。学習指導要領地理歴史科日本史Ａ・Ｂの「内容とその取り扱い」では，冒頭に「歴史と生活」「歴史の考察」がそれぞれ記されている。「歴史と生活」「歴史の考察」では，生徒の居住地や学校周辺の地域社会の変化を調べることで現在の地域社会が歴史の産物であるのに気付かせることを目指している。校外学習でも生徒は「知っているつもりでいたが，思ったより，知らない場所が多くて驚いた。」や「身近でよく目にする場所（中略）なぜそこにそのものがあるなど，つゆ知らず通り過ぎているだけだったことに気づかされた」と感想を書いている。生徒は，校外学習を経たことで歴史が断絶しておらず息づいていることを，そして地域社会は過去の人の足跡によって産まれたことを実感できたと考える。

次に今後の課題を述べたい。第一に，実施時期についてである。通常，歴史の授業は，過去から現代への通史学習が授業展開される。そのことを考えれば，学習終了後が校外学習には，最適だと私は考える。生徒へのアンケートにも学習終了後の希望が５割前後存在した。これらを踏まえ校外学習の実施は，今回と同様，２～３月が適当と考えられる。しかし冬の寒い時期の見学は，健康面でも問題があり，学習終了後とすべきか，歴史の視点を学ぶため，夏休み前に実施すべきかなど授業時間などで検討が必要である。第二に，安全や生徒を校外に連れ出す問題である。今回の校外学習では，教員２名に引率を依頼したが，通常では教員などに引率を依頼するのは厳しい面も予想される。見学する場所の交通事情を十分考えるばかりでなく，引率者などの面でも検討を要する。第三に，「社会の形成者としての意識をどれだけ校外学習を通して学んでもらえたか。」との問題である。校外学習後の試験で，見学場所の②と⑤を比較する形で，保存と開発との社会のあり方から，今後の社会の形成者としての生徒の考えを述べさせ，意識的に現代社会と歴史を結び付けさせた。日常の生活において，現代的課題と歴史を結んで考えるには，校外学習は有用であった。しかしどのような歴史学習においてもこの学習が展開できるわけではない。そのため，他の方法でも現代社会と歴史を結び付けて考える力を身に付けさせる学習を模索する必要があろう。

<付記>

校外学習を展開するにあたっては，野口剛先生をはじめとした筑波大学附属高等学校の先生方，筑波大学大学院修士課程教育研究科同期である中村光貴・神田基成・濱田夏実・米澤郁人の各氏，同じく同研究科の山田智之・富田光一

郎の両氏に時間割変更，コース選定や引率などの面で大変お世話になりました。

〈註〉

(1) 両クラスとも１・２限に実施した。また実施時期は，２月20・23日に各組単位で実施した。

(2) 草原克豪「新渡戸稲造―二人三脚で重ねた実績―」御厨貴編『時代の先駆者・後藤新平　1857－1929』（藤原書店，2004年）参照。

(3) 井田「人間形成における野外観察・調査の意義」（教育学系論集25（１），p71－82）が文学と地域観察は結びつけられることについて，指摘している。筆者は歴史学習でも，当時の様子を読みとる手段として文学作品の活用は，有効であると考えている。

(4) 地理における従来までの 野外調査・観察，フィールドワークについての実践は，井田仁康『社会科教育と地域』p139－143，井田仁康「人間形成における野外観察・調査の意義」（教育学系論集25（１），p71－82）に詳しい。

(5) 歴史的要素を中心に取り入れた野外調査・観察，フィールドワークなどとして，僅かに伊藤純郎「地域調査の視点―筑波山巡検を通じて―」（筑波社会科研究，11，p47－57）や伊藤純郎『調べてみよう地域・郷土』（ぎょうせい，2000年），高橋洋明「総合的な地理歴史巡検の設置経緯と実践」，山口幸男・清水幸男編『これが新しい地理授業の現場だ』古今書院，2005年，p184－194などがある。